



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

阪上, 孝

---

CITATION:

阪上, 孝. あとがき. 人文學報 2001, 84: 247-248

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48557>

RIGHT:

## あ　と　が　き

ここに集められた八つの論考は、1994年4月から1998年3月まで行われた共同研究「近代社会における研究者の組織化」の成果である。

「科学の世紀」と呼ばれる19世紀は、また、研究者の組織化の時代でもあった。ドイツ自然科学者・医師協会やイギリス科学振興協会といった科学者団体の結成、専門学会の成立、国家や企業による研究所の設立など、19世紀、とくにその後半に目立ってくる事態は、その端的な現れである。

研究者の組織化をもたらした第一の要因は、科学の他の知的活動からの自立と専門分化である。自然科学が哲学から自立し、その研究対象に即して専門分化するとともに、ロイヤル・ソサエティのような科学愛好家の団体に代わって、自然の探求を行う専門的知識人の団体として科学者団体と専門学会が誕生する。科学者は社会における自らの役割と地位に関する認識を深め、職業としての科学の確立と科学振興を求めて組織的な運動を展開する。そのなかで、研究者の組織化の主体的要因として「科学のイデオロギー」が形成され、成長する。

第二の要因は、科学と国家の緊密な結びつきである。科学研究の生産的技術への応用の道が開け、一国の科学的進歩が産業上の優位をめぐる競争の規定要因になるとともに、科学の振興は国家と企業にとって重要な問題になるからである。国家や企業による研究所の設立はその表現であった。他方で、工業化と都市化にともなって失業や犯罪といった社会問題が深刻化し、階級闘争が激化するが、それに有効に対処するためには、まず第一に、社会の実状を観察・調査することが必要であった。こうして社会観察と統計のもとづく社会調査の技法の確立と、そのような技法を身につけた専門家の組織化が要請されるのである。この共同研究に先だって行われた共同研究で、私たちは知識を、1) 認識をめざす理論的・学問的な知識、2) 日常生活を律する生活知、3) 理論的知識にもとづきながら、生活知に働きかけ、その変革を目指す統治的知識の三つの水準に区別し、とくに3)の水準の知識の構成と役割に注目した(『統治技法の近代』、同文館)が、先に述べた問題状況のなかで、この水準の知識の重要性はいっそう増し、その組織化が求められるのである。

第三の要因は、科学の国際化の進展である。パスツールは、科学に国境はないが、科学者には国境があると言った。じっさい科学者の組織化はナショナリズムに支えられ、国民国家の枠内で進展した。しかし万国博覧会のさいに国際的な学術会議が開催されたことにも見られるように、この時代に科学者の国際交流が活発になり、それが研究者の組織化の契機になったこと

も否定することはできない。国民化と国際化という、一見したところ対立するように見える動きのなかで、研究者の組織化が進行するのである。

この共同研究に先立つ二つの共同研究で、社会における知識の位置と機能を検討してきたが、それとのかかわりでいうと、研究者の組織化は、科学的知識が社会の不可欠の有機的環節としての位置と役割を確立したことの現れと見ることができる。私たちはこのような視点から研究者の組織化の諸相を検討したのである。

研究会で報告をいただき、熱心に参加していただいた参加者のうち、何人かの方からはさまざまな事情のために論文をお寄せいただけなかった。他方で、編集が遅れたために、早くに原稿を寄せていただいた方には、多大のご迷惑をおかけした。とくに川越修氏にはいち早く原稿をいただきながら、編集が遅れたために、他所で発表されることになった。これらの方々に、編者としてお詫び申し上げる。

2001年2月

阪 上 孝